

「猫を愛でたい」

（茨城県天心記念五浦美術館・2024年10月26日～12月8日）



「猫を愛でたい」、この企画展に惹かれ、北茨城市の茨城県天心記念五浦美術館を訪ねた。そこから太平洋を眺望できる、こちんまりとした美術館である。

猫の鳴き声に迎えられるて巡る会場は、まさに猫尽くし。江戸から現代までのさまざまな猫作品の展観だ。例えば、蝶や牡丹と組み合わせた吉祥画、擬人化あり、化け猫ありで多種多様な姿態を描く浮世絵等。また、菱田春草「黒猫」、小茂田青樹「春の夜」、佐藤玄々「牝猫」、熊谷守一「牝猫」、堀文子「春の庭」、竹内浩一「艶」等々。

帰路、往復一五〇キロの小さな旅に大きな充足感を覚えた。どちらかと言えば犬派だが、愛らしくミステリアスな猫に魅了されたし、それ以上に、アート浴の喜びとでも言おうか、作品それぞれに宿るエネルギーを一身に浴びた喜びが、ひしひしと込み上げてくるのだった。

車を降りると、さつき観た竹内の「艶」の猫そっくりのサバ白が、赤いチャーカーを揺らしながら道を渡り、お隣へ帰ってゆくのが見えた。

（金子智佐代）

アレックス・カー『ニッポン巡礼』

（集英社新書ヴィジュアル版）



若い頃から、就寝前床に入ってから読書するという悪い習慣ができてしまった。文学書、哲学書などを枕辺でパラパラめくり、その時気に入った本を読んでいた。五十代までは、引き込まれ朝まで読み耽ることもあったが、六十歳を過ぎる頃から、感情や思考が刺激されるより、心地よい眠りに誘われる本を求めるようになった。

七十六歳の今の私には、山岳エッセイ、釣り随筆、紀行文など自然や風景がたっぷり描かれているものがよい。

少し古くなったが、ここ数年では冒頭の作品が気に入っている。三十年前『美しきニッポンの残像』で、祖谷の自然と生活の美を発見した作者の審美眼に刮目させられた。

本書は、日本各地の隠れ里を写真入りで旅行案内書風に紹介している。白洲正子の畏まった『かくれ里』もよいが、気軽に読めるところがよい。例えば、萩の章では石州瓦の集落のよさや、瑠璃光寺五重塔の美を語るなど、滅び行くニッポンの美や文化への洞察が随所に見られ、私は慰藉され、安堵感に包まれるのを感じるのである。

（菊山正史）